

(6) 自閉症支援現任者の学びを通じた自己認識変容に関する一考察

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 ○澤田 早苗

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 大田 晋

【要 旨】

1. はじめに

近年、自閉症に関する療育法および実践報告は多岐にわたる。中でも、自閉症支援について、米国、英国をはじめ多くの国で取り入れられているものとして、TEACCHプログラムがある。日本でも、その支援現場において、TEACCHプログラムに基づく支援に取り組んでいるところは少なくない。しかし、研究者らが厚生労働省障害者保健福祉推進事業の助成により平成21年度に岡山県内を対象に実施した調査では、TEACCHプログラムに基づく支援に取り組み始めたものの、途中でその取り組みを辞めてしまう現場もあることがわかった。そこで、本研究ではTEACCHプログラムに基づく支援の実践を通じ、支援者自身の自己認識の変化に焦点を当てることで、その支援継続の要素について検討することを目的とした。なお本研究は、平成21年度医療福祉研究による助成を受けている。

2. 対象および方法

対象は、本学TEACCH部主催のトレーニングセミナーを受講し、その後も継続的に本学のフォローアップセミナー等講座の受講を継続的に続けている

実践者3名を対象とした。

調査方法は、半構造化面接法である。個々の実践や学びを継続するための要素を検討するため本方法を採用した。

3. 倫理的配慮

本研究は、川崎医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得ている。

4. 結果および考察

本報告では、調査の内容の一部である支援の継続の要素についてのみ報告する。3名全ての対象者が、TEACCHプログラムを取り入れた要素として、自分の実践がうまくいかないという体験をしていた。また、その継続の要素として講座など継続的に学ぶ機会が身近にあったこと、対象者自身が迷い悩んだ時専門家の下で再考する機会があることが大きな要素となっているのではないかと考えられた。

5. 今後の課題

支援者自身が、自閉症児・者支援に携わる中で、自分自身に対する認識の変化についてどのように感じているのか、今後検討していきたい。また、対象者が少ないため、対象者を増やす必要がある。